

“ものづくり”に誇りを持つ、 明るい職場

有限会社スエヨシ補装具製作所

職場
ルポ

EMPLOYER REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



有限会社スエヨシ補装具製作所
〒980-0801 宮城県仙台市青葉区木町通2-3-46
TEL 022-234-3754 FAX 022-273-7912

WORKSHOP REPORT



スエヨシ補装具製作所の作業室。
道具類も整頓されている

先代社長の会社を 甥が引き継ぐ

仙台の繁華街から北へ。東北大学病院近くに、義肢・装具をつくる「有限会社スエヨシ補装具製作所」がある。小路を入った奥の二階建ての建物は、肌色の外壁がまだ新しい。玄関の自動ドア、三枚の引き戸、屋内には段差がなく、ドアのガラス越しに作業風景が見える。「会社」というより「工房」といった感がある。

スエヨシ補装具製作所は、先代社長の佐々木末吉さんが、兄弟で会社を営んでいた佐々木義肢製作所から独立して、一九六〇年に創業した。勤続四〇年の佐藤富一さんに當時を振り返ってもらう。



「先代社長は、親兄弟が使うものと思って作りなさい。家族が使うと思えば、いいものができるはずといつも言っていました。私たちはその思いに答えられるようにがんばり、患者さん

とは家族のようなお付き合いがありました」

先代社長は長年、使用者との信頼関係を築いてきた。

「先代社長が亡くなったとき、私はこの業界しか経験がありませんし、新しい仕事を探すのはたいへんです。みんなベテランで技術がありましたから、会社を存続してくださいと頼みました」

先代社長の他界後、家族も亡くなり、後を継ぐ人がなく、数年後の二〇〇三年、甥の佐々木啓一さんが社長に就任した。

「伯父は、東北大学医学部の整形外科の先生から技術があると信頼されていたようです。戦争で義足が必要になった方の義肢製作に携わったと聞いています。伯父が亡くなり、働いていた従業員たちから、『仕事をしていきたい』と言われるので、会社を続けることを決めました」

佐々木社長は、補装具業界に関係したことはなかったが、医療器械や病院設備販売などの仕事をしてきた。

「まるで知らない世界ではないということもありました。木の家と同じで、補装具に使用する木も桐の木はいいと聞いています。そんな桐の木を使った伝統的な技術は捨てがたいのですが、今は木で作れるところは少なくなっていますね。義肢・装具について少しわかるようになりましたが、技術がよくなければ、評価されない仕事です。使用する人の肌の感

触を察しながら微調整をするには、感性和熟練の技が必要だと思います」

一年半前、老朽化していた社屋を建て替えた。

「最初は修理しようかと思ったのですが、土台も痛んでいたんで建て直しました。社長を引き受けた後、ちょうど障害者自立支援法ができ、事業は厳しくなっています」

信頼関係が第一。 伝統的な補装具を得意に

スエヨシ補装具製作所では、大腿義足、下肢義足、義手、膝装具、下肢装具、足底装具、肘装具、体幹装具などを作っている。最近では、腰や足を痛めた人、脳卒中で倒れた人など、下肢装具の注文が多いそうだ。

「年配の患者さんが多いのですが、ご年配の方は義足を履き始めたころからな



佐々木啓一社長



手作りされる装具

じんだものを履かれていて、最新の義足を履きたいという方はあまりいないですね。試してみても前のタイプに戻る方が多いです。お互いの信頼関係がないと、患者さんも信頼してくださらないと思いますが、何でも遠慮なくお話できる患者さんばかりで、家族のようです。今後とも患者さんに満足していただける会社であり続けたいです」

社長は、従業員の仕事を信頼している。

「自分たちでできる限りのことは一生懸命にやってくれています。当社は先代社長が築いた昔ながらの義肢のほう得意だと思えますが、義足や義手の最新技術も勉強していきたいと思えます」

従業員九名。うち障害がある人は六名。

五名が製作現場で働いている。

「体を裸にして寸法を測って合わせる。患者さんの体の一部ですから、患者さんの体に合うことが第一です。技術が確かで、見栄えもいいものでないとなりません。補装具がないと生活できないわけですから、いいものを作って差し上げて、患者さんに満足していただく。信頼関係は大切にしていきたいです。将来も、大儲けはしないでしようが、食べてはいけるだろうと思っています」

義肢・装具は、身体障害者手帳を持ち、市町村役場で申請をして判定を受ければ、費用が支給される。病院の場合も、領収書と医師の証明書を保険申請機関に申請すると払い戻しが受けられる。仕事の手順としては、病院や更生相談所などに出向いて採型し、製作、仮り合わせを

して調整、仕上げ、引き渡しと進む。

国際アビリンピックで 銀メダル

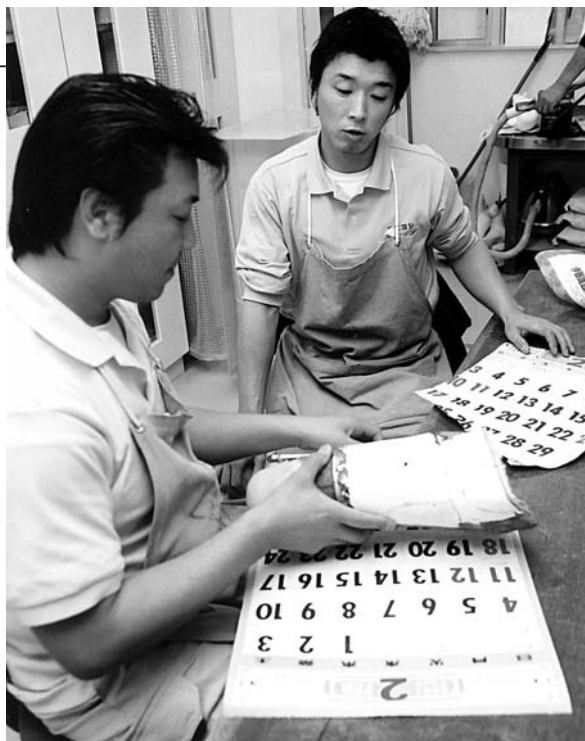
スエヨシ補装具製作所の若手、伊藤則彦さんは、昨年の国際アビリンピックの「義肢」種目で銀メダルを獲得した。三十四歳。サラリーマン、家業の手伝い後、転職してまもなく三年になる。宮城障害者職業能力開発校を卒業後、技術を磨いてきた。

「三〇歳までには、自分のやりたい仕事を見つけれたいと思っていました。私も義足をつけていますので、勉強してみようと思いました。自分の義足もここで作りました。採型してもらい、自分で調整をしています」



国際アビリンピック静岡大会の「義肢」種目で銀メダルを獲得した伊藤則彦さんも働いている

WORKSHOP REPORT



鈴木紀史さんは、ケガが治って「何か役に立つ仕事がしたい」と、今年1月入社した

訓練校を卒業したからすぐ一人前になれるわけではない。先輩に教えられながら、一つずつ経験を積んでいく。国際アピリンピックでは、国内大会での成績もあり、メダルに届けばラッキーとの思いだったとか。

「金銀は無理で、あわよくば銅、特別賞が取れればと思っていました。競技時間ギリギリで提出したので、銀メダルと聞いてびっくりしました」

これからも、この仕事を続けていきたいと考えている。

「得意なものはまだないです。基本どおりに作っても、合うものができるとは限りません。その人のクセがありますから、歩き方とかの特徴をつかむことが大



仕事の喜びは、 患者の笑顔

事です。患者さんに喜ばれるようなものを作っていくたいですね」
今年一月には伊藤さんの後輩にあたる新人が一人入ってきた。ケガをした経験をもとに、何か人に役に立つ仕事がしたいと、転職してきた鈴木紀史さん。これから技術の習得を目指す。

いろいろな工具が並ぶ作業場は、ものづくりの工房というイメージだ。大先輩の本木和徳さんは経験二八年。ベテランとして補装具の仕上げを担当しながら、みんなの相談に応じている。

「本人のためにも会社のためにも、国際アピリンピック出場で不在の間はみんなまで支えあって、仕事を分担しました。



経験28年のベテラン本木和徳さん。製作現場のよき相談相手として活躍している

世界大会銀メダルの人が同じ会社で働いているというのはうれしいですね」
本木さんは伊藤さんと同じ、宮城身体障害者職業訓練校で技術を身につけた。本木さんに義肢・装具作りの仕事について聞いた。一人前になるには？
「この道、一人前になるには一〇年かかるでしょう。生身の人間に合わせるいくのですから、いまでもわからないことはたくさんあります」
この仕事に向いている人は？

「この仕事を好きになることです。嫌いだっただけではありません。私は半分趣味みたいなもの。患者さんの笑顔が好きです。『よかった』とか、『痛くない』といわれると、うれしさは倍増します」

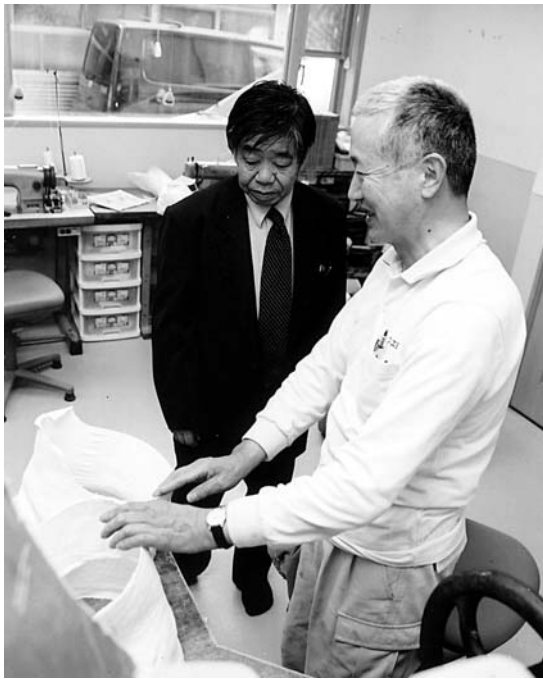
患者から喜びの言葉を聞くことが、きつと仕事の醍醐味。仕事で必要なことは？

「前回のことを覚えていて、ここが合わなかったから今度はこうしようとか考える記憶力と、勘にプラスチック経験が大事です。補装具は一人ひとり違い、同じものはありません。これでよかったということはないですね。日々勉強です。私より上の人はいいいますから」

大腿、膝下、ひじなどの義足や義手のポイントは、患者の体と義肢の接点となるソケットだそうだ。

「いちばん大事なものはソケットです。ソケットがうまく合わないと、その下にどんないい部品を使っても、痛いとか、使えないものになってしまいます」

仙台は海にも近い。休日には石巻などの防波堤で釣りをする。通勤は車で、社内では電動車いすで動く。以前の建物は洋式トイレがなくてたいへ



営業を担当する佐藤富一さん（写真左）。今野義光さんに顧客からの注文の指示を伝える

んだったそうだ。

「でも昔の建物は狭かったので、動かないで仕事ができました。電動車いすを使わずにすみましたね」

忙しい時期は春と秋。患者とのふれあいは、たくさんありすぎて……とのこと。

「寒いとき暑いときは、患者さんも動きたくないでしょうからね。いい補装具を作っていれば、口コミで患者さんの評判は広がると思います」

職場は和気あいあい。技術力で勝負

作業場では、胴体の石膏に合わせてコルセットを作ったり、義足の仕上げの天然皮を裁断したりと、それぞれの仕事がある



続く。使う部分によって、天然皮革、人工皮革などを使い分けているが、天然皮革は伸びる方向があり、皮のクセもある。失敗するとすべてやり直し……。真剣に手を動かしながらも、笑い声が絶えない。

一番の先輩、佐藤さんが営業から戻

休憩時に雑談する、スエヨシで働く皆さん

WORKSHOP REPORT

ってきた。勤続四〇年。かつては製作していたが、いまは営業として病院などをまわる。

「昔と今日、業界は変わってきました。以前は個人的なつながりで仕事ができましたが、いまは違います。業者も多くなり、営業はたいへんです。仙台市で三、四軒だった同業者は、いまは大小合わせて十数社あるでしょう。独立して、一人社長も結構います。注文を受けると会社に戻ってきて、こんな感じで作って欲しいと説明をします」

最近では、カラフルな模様入りのカラー



補装具は一人ひとり、その人に合わせて手づくりされる

タイプの装具が人気だそう。

「ファッション性があるものですね。病気だからと暗くなつてはいけなく、気分を明るくするカラフルなものという注文が増えています」

もう一人、川名秀昭さんが出先から戻ってきた。こちらにきて一年半だが、経験二五年のベテラン。前の会社が閉鎖されることになり、経験を生かして転職してきた。

「前は一人で作業していました。こちらには人数が多くて、和気あいあいと仕事ができます。相談しながら仕事ができるのがいいですね」

また別の作業が始まる。肌色のプラスチックを高温で温め、川名さんと伊藤さんが呼吸を合わせて石膏で作られた膝下短下肢に被せると、石膏が人間の足のようになつた。見守っていた本木さんから「OK」が出る。

「技術があるところが残るのではないでしょう。患者さんの評判が広まると信じて、仕事をしています」

義肢や装具は、患者にとつては一生のお付き合い。使用者たちとの付き合いには、確かな技術と信頼関係がものをいう。先輩から後輩へ技術を継承し、一人ひとりに合わせて手作りする。

最後に製品を持って、みなさんの集合写真を撮った。ものづくりにかける誇りが伝わってきた。



型の石膏に合わせて、プラスチックで成型する川名さんと伊藤さん



下肢に障害のある川名秀昭さん。営業・製作と忙しい